

第5章 ま と め

ここでは、本遺跡で検出された縄文時代の陥し穴と中世における本遺跡の性格について述べてみたい。

陥し穴遺構について（第2表）

近来、秋田県内の遺跡で陥し穴遺構を検出する例が増えてきている。これらについては、第2表にまとめた。分類は、田村壮一氏による、A型：溝状を呈し細長い形状を示すもの、B型：楕円形若しくは長方形を呈するもの、C型：円形か方形を基調としたもの、^(註1)に従った。表から、A型が圧倒的多数を占めていることがうかがえる。

本遺跡では、全部で6基の陥し穴遺構を検出した。いずれもA型で溝状を呈するものであった。低山地上の平坦面に3基、北側斜面テラス部分に3基がそれぞれ位置する。規模は、開口部が2.6～4.35m(長軸)×0.3～0.6m(短軸)、坑底部が3～5.15m(長軸)×0.2～0.95m(短軸)、深さが1～1.45mである。断面形は、長軸方向は両端が外側に広がり、坑底部が開口部よりも長い袋状を呈し、短軸方向は「U」字形あるいは不整の「U」字形を呈している。埋土の特徴としては、全体的にローム粒子あるいはロームブロックを混入しているが、これは遺構が埋没する過程で壁が崩落したものと思われる。主軸方向は、磁北に対して西に偏っているもの(01, 02, 03, 05, 06)と、東に偏っているもの(04)に分けられる。

このような形態をした遺構について、従来は「陥し穴」説の他に、「墓坑」説、^(註2)「便所」説、「馬関係遺構」説が唱えられてきたが、横浜市霧ヶ丘遺跡の発掘調査以来「陥し穴」説が定説となり現在に至っている。本遺跡においてもTピット＝陥し穴説に従って、これらについて見ていきたい。

遺構が構築、廃絶した時期を推定する手掛かりとなるものとして、出土遺物、火山灰との層位関係、他遺構との切り合い関係などがあげられるが、本遺跡の陥し穴からはいずれも認められなかった。

配列状態、埋土の堆積状態から2基をセットとして把握可能なものは、01と02である。北側テラス部分に約1.5m間隔で並列しているうえ、等高線に対して平行であることから、いわゆる「ケモノ道」との関係を連想させる。「ケモノ道」と陥し穴の関係について、青森県牛ヶ沢^(註3)遺跡では、溝状ピットの長軸方向がケモノ道の方に平行するように配置されたと想定されている。シカ道やイノシシ道は平坦部が丘に移行する斜面の下端や台地の縁辺を通ることが多い。これらのことから、テラス部分が「ケモノ道」であったと仮定することが可能である。

構築方法を示すものとして03があげられる。長軸方向の断面が右と左で段差がついているものである。青森県沖附(2)遺跡^(註4)で「未完成の溝状ピット」の可能性のあるものとして報告されている例は、両側を同時に掘り下げて完成する過程を示している。本遺構の場合、①両側をある程度掘り下げたあと片側ずつ掘り切る、②片側だけを掘り切ってから残りを掘る、③この形で完成の状態、の3つの可能性が考えられる。本遺跡における他の陥し穴の例から見て③は削除されるであろう。溝状ピットの形態が細長く深いという物理的に非常に掘りにくいという点から考えにくい。本遺構の場合、①の途中で構築作業が放棄されたものと解釈したい。

調査区から検出された溝状ピットのうち、なんらかの可能性が推定できるものは、以上の3基であった。遺構の性格上、構築、廃絶年代を確定する手掛かりに乏しいため、今回の調査では埋土の土壌分析の必要性を痛感させられた。

中世における石神遺跡について (第21図)

石神遺跡は、地形及び空堀の存在から中世の城館のひとつとされている。調査の結果、空堀のほかに中世に属すると思われる遺構及び遺物が皆無という状況であった。ここでは、以下の諸点から遺跡の性格に迫ってみたいと考える。すなわち、(a)歴史的環境、(b)地理的環境、(c)地元に残る伝承、(d)調査で得られた知見の4点である。

(a)歴史的環境

大曲市と南外村を分ける低山地上には、本遺跡のほか六郎沢館、大向館、薬師堂館など中世の城館が分布している。大向館と薬師堂館は大曲市から本荘市へ抜ける道をはさむように位置している。一方、その道沿いにある中山集落から分かれて檜岡に抜ける道と小出川をはさむように六郎沢館と本遺跡が位置している。直線距離にして1kmである。六郎沢館は、標高120mほどの山の上にあり、30m×23mの主郭とそれを取り囲むように土塁と帯郭が配され、北側に空堀を有する。大曲方面からの敵の侵入を警戒するか、くい止める役目をもっていたと推定されて^(註5)いる。また、本遺跡の南約200mの小山に神社が祭られている。これには観音様が祭られ、毎年4月23日に祭礼が行なわれるという。神社の石燈籠には、文政13(1830)年という文字が彫られている。今回発掘調査した部分は、昭和20年前後に開墾が行なわれている。

(b)地理的環境

南南東から北北東に蛇行して流れる小出川と、東北東から西南西に向かって流れ小出川と合流する中山深山沢とによって開析され、半島状に水田に突き出ている低山地の上に本遺跡は立地する。その山の裾をまわるように市道大畑線が通っている。遺跡からは、南の中山方面、西の六郎沢館、北の檜岡方面への眺望がたいへん良い。また、中山深山沢は水量の豊富な清流であるため、生活用水のほか水田耕作に利用されている。このあたりの水田は、いわゆる谷津田